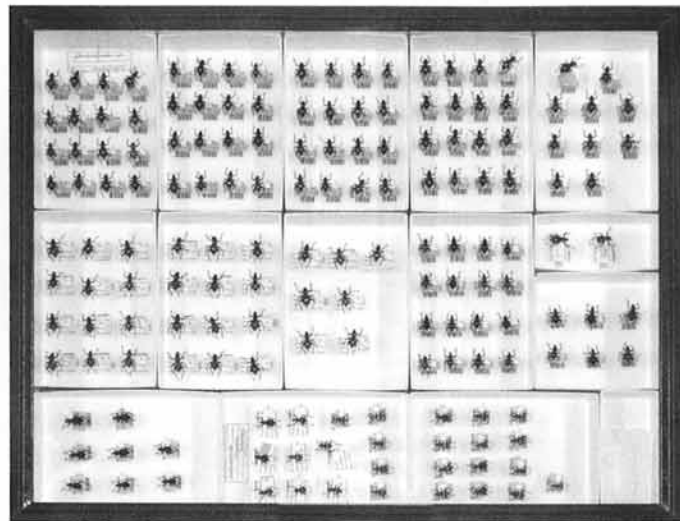


人と自然の博物館の資料収集活動

人と自然の博物館ではさまざまな資料を収集しています。収集の対象は化石、岩石、鉱物、ボーリングコアなどの地学系標本、陸上の植物、昆虫、鳥類、哺乳類、淡水魚などの生物系標本、そして古図絵や写真など景観関係の資料も集めています。こうした資料は過去そして未来における自然・環境の変遷を推し量る上で重要な情報源です。

収集方法も寄贈、館員自身による収集、委託、購入と様々です。当館設立は、著名な昆虫学者である阪口博士の昆虫標本コレクションが県に寄贈されたことが一つの契機となっていますが、資料コレクションの寄贈は今でも非常に重要です。



阪口コレクションの一部（フィリピン産ヒメカタソウリムシ）

本館はまだ開館して十年ほどしかたっていない。博物館の本来の価値は、長期にわたって資料を収集することによって、膨大な資料を集積し、その中から新たな知識を得ることにあります。このように博物館の機能はまさに温故知新にありますので、昔のことは何でも知っているお年寄りのような側面がなければなりません。ところが、博物館としては、本館は開館以来十年しかたっていないまだまだ赤ん坊のような存在です。館員自身による収集だけではちょうど小さな子供が自分の生まれた以前のことを何も知らないようなものです。ですから、本館開館の何十年も前から集められた大型コレクションの寄贈は本館が早く大人になるためにどうしても必要なものです。それによって、長期にわたって集められた資料を後の世代まで保存活用する場、博物館、になれるのです。

長期にわたる労力の積み重ねである大型寄贈コレクションに比べれば、現在入手可能な資料の寄贈、博物館研究員自身による収集、収集委託などはあまり重要でないようにみえます。しかし、大型寄贈コレクションも元来はこうした地道な収集活動の結果として生まれたものです。今に関する資料を将来のために確実に残すこと、これもまた博物館の大切な仕事です。

時として、従来の収集活動では見つからなかったものが研究員による収集で発見されることがあります。研究員の専門性はまた別の面でも資料の多様化に寄与しています。当館は国からの科学研究費補助金を申請できる機関です。この科学研究費の補助金など外部からの研究資金によって行われる収集活動も県費による収集活動とならんできわめて重要です。こうした外部研究資金による収集活動の範囲は国内のみならず海外もその対象地域となります。その結果植物、昆虫、そして化石標本など多様な資料が県外から収集されています。

以上のように、当館における資料収集はかなり充実していると自負していますが、海生生物資料の収集はいくつかの例外を除けば行われていません。南北で海に接する兵庫県になぜかと思われるかもしれませんが、他府県の同等機関と比べても誇るべき収集体制を確立するためには、陸に関する資料にとりあえず集中し、海に関しては省くしかないので。しかし、いつかは海洋生物資料の収集もできるようなになればと思っています。

（自然・環境評価研究部 三枝春生）

表紙の写真

左上：絶滅危惧植物の種子が保存されている種子保存庫。左中：生物系収蔵庫に並ぶ昆虫用標本棚。
左下：2001年6月津名町で収集後、砂に埋められていたナガスクジラの発掘作業（2003年6月）。
右上：ボルネオ島での昆虫資料の収集。右中：整理中のさく葉標本。右下：化石のクリーニング作業（化石処理室）

より多く、より効率的に —ひととはく収蔵品データベース—

テレビ番組で研究者がインタビューされる場面、机の周りが書類や本などが山積みされ、ものすごく散らかっているのをご覧になったことがあるでしょう。

あんな風ではどこになにがあるか分からないのではと心配になりますが、本人は平気なもので、それぞれのありかはちゃんと覚えていて、必要となれば山の中から発掘してきます。まるで手品のようなのです。しかし、ときには思い出せなくなり、さて、あれはどこにしまったか、この一節が載った文献はどこだったかと、かすかな記憶を頼りに手当たり次第に探しまわるはめに陥ります。

獺祭（だっさい）という言葉があります。獺（カワウソ）は捕らえた魚を岸に並べる習性があり、その姿がお祭りをするようにみえるそうです。そこから、捜し物をして本や資料を広げちらすことを「獺祭」と呼ぶようになりました。もともとは詩や文章を書くときの調べ物をする様子を示すのですが、獲物を並べるのですから、困ったなかにも少し得意げな様子も感じられなくもありません。なんだか、博物館にも当てはまりそうな言葉です。

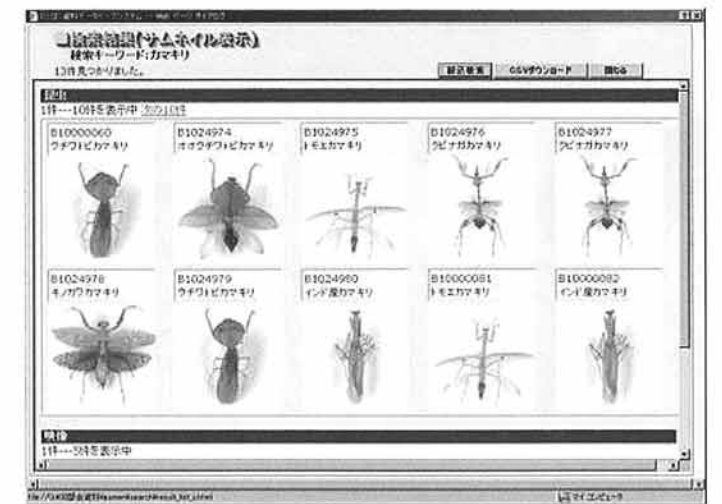
あふれるほどの資料に取り囲まれているのも、個人にとっては一つの幸せかもしれませんが、公共機関が行う収集活動は、成果を誰もが利用できることが大前提です。そして、必要なものを探し出すスピードも大切な要素です。そのために考え出されたのが、収蔵品管理のためのシステムというわけです。

収集された資料は、それだけではただの「もの」です。しかも開館後十年を経過して、ひとにはくには地学関係で5万4千点、生物関係で100万点を超える収蔵品が蓄積されています。これを研究や普及教育のために利用するには、なにがどこにあるのか、すぐわかるように収納されていなければなりません。ただの「もの」を有益な「資料」に変貌させる、それが分類・整理であり、効率的な利用を可能にするのが管理・運営の力です。そこで登場するのが、収蔵品管理システムです。図書館でほしい本がすぐに探せるのも、すべての本が一定の基準で分類、整理されているからです。

ひととはくの収蔵資料は、生物標本、岩石や鉱物、図書、写真、画像といった種類を問わず、そのすべてに固有の番号が付けられていて、その番号で管理されています。資料の名前や採集場所、採集者など重要なデータが、この固有番号とともに「収蔵品データベース」に登録されています。そうすることで、どこかに紛れてしまうこともなく、必要なときにはすぐに取り出すことができるのです。

寄贈された資料が多いのも、博物館収蔵資料がもつ特徴の一つです。これらにも固有の番号が付けられたうえで収蔵庫で大切に保管され、研究等に活用されています。その一端を本館3階「ナチュラルリストの幻郷」でご覧いただけます。

（自然・環境評価研究部 秋山弘之）



平成16年度から稼働を始める収蔵品データベースの画面